

発表題目：説法による弟子のめざめの構造

初期仏教においては、『スッタニパータ』をはじめとして、様々な経典に、釈尊の説法によって弟子たちがめざめる、いわゆる「帰依センテンス」なるものを多く見出すことができる。その「帰依センテンス」では、釈尊が説法を行う際に、**pra-√kāś** という動詞が用いられているが、この動詞は従来「顕示する・開示する・説示する」と訳されて来た。ところが、**√kāś** は本来「輝く・顕われる」を意味する動詞であり、これが説法場でいかなる役割を担っているかについての研究が全くなされていないと言っても過言ではない。

√kāś は **√cakṣ** 「見る・現わる・告げる」に通じ、同時に **√khyā** 「語る」の働きを担っていることから、**√kāś** は「輝く（顕われる）」と「みる」と「語る」の三つの意義を内包していることになる。そして、**pra** という前接字は「前に・～の方へ」という方向性を示すと同時に「強意」の役割を果たすことから、**pra-√kāś** は基本的に「強く前に輝く（顕われる）」「強く前をみる」「強く前に語る」という意味を持ち得ることになるのである。

ちなみに、この動詞は初期仏教聖典においては、**dhamma** と **brahmacariya** という語と結びつく用例を多く見出すことができるが、今回の発表では、**pra-√kāś** という動詞がこれらの語と結びつくことによって、どのような働きを担っているかについての検証を行うことにする。

説法場では当然「語り手」と「聴き手」が前提されなければならないが、「語り手」としての釈尊が **pra-√kāś** すると、「聴き手」たる弟子にはおそらく「驚嘆」や「覚醒」という心的変化が起こることが予想される。すると、釈尊による説法は、単に教えを「語る」とか「示す」という行為ではなく、説法によって弟子たちの「めざめ」を促す特別な働きを担っていると言い得るのである。つまり、釈尊の説法には、**pra-√kāś** が本来持つ「輝く」「輝かせる」という意味を内包する機能があり、その働きによって、弟子たちの「めざめ」が実現するのではないかという考察を行いたいと考えている。

ちなみに、バラモン教の聖典では、**pra-√kāś** は **prakāśa** という名詞形を散見することができ、それらは大体において「輝き」というある意味での「光照作用」を担っているため、今回の発表ではそれらの用例を簡単に紹介することによって、初期仏教聖典に頻出する **pra-√kāś** という動詞がどのような機能を内包しているかについての考察を行い、この動詞が大乗経典ではどのような形で現れるに至るかについて、簡単に紹介することにする。

キーワード：**pra-√kāś**、**dhamma** (dharma)、**prati-√bhā**